

【3 大村市 Omura City】



長崎空港へと渡る箕島(みしま)大橋から

大村市では、市の西側に広がる大村湾に浮かぶ長崎空港や、JR 大村線の大村駅などの平地、南部の日岳や中部の琴平岳、北西部の鉢巻山の展望所、北東部の多良岳一帯など、市内各地から大村湾・諫早市越しに“[北西面の雲仙岳](#)”が眺望できます。少し意外なところでは、長崎自動車道(上り線)の今村 PA から眺めることができます。空気が澄んでいれば、大村湾内を航行する高速船(時津～長崎空港～ハウステンボス)から、海上の雲仙岳が眺望できます。

中世の時代、南蛮船来航と共にキリスト教が伝来し、1563 年にはイエズス会が雲仙岳そびえる島原半島の南端の口之津(西九州の交通の要所)に入り、島原半島での布教を開始し、口之津は九州管内区のキリスト教布教の拠点となりましたが、長崎～大村を治めていた領主・大村純忠(島原領主・有馬氏からの養子)は、同年いち早くキリスト教に改宗し、日本で最初のキリシタン大名となりました。その後、同じくキリシタン大名となった島原領主の有馬晴信(純忠の甥)や大分領主の大友宗麟と共に、日本国内での布教の成果をローマ教皇へ示すため、雲仙岳南麓にあった有馬セミナリヨの第一期生4名を“天正遣欧少年使節”としてローマへ派遣しました(1582～1590 年)。

豊臣秀吉・徳川家康によるキリスト教禁教以降、島原・天草においては、領主の交代も相まって、厳しい信徒弾圧や過酷な徴税によって領民の不満が高まって行き、有名な“島原・天草一揆”へと突き進みました。その頃、大村氏は既にキリスト教から改宗しており、一揆鎮圧の幕府軍への協力要請を受けて、一揆軍が襲撃する可能性のあった長崎へ藩の兵を派遣し、警備に当たりました。一揆鎮圧後は、島原・天草領内に無人地帯が生じたため、幕府の命令に従い、藩内の領民の一部を島原へ入植させました(当藩では、新天地を求めて勝手に移住する領民も多く現れました)。

江戸後期に九州を旅した多才な知識人・頼山陽(漢学者、歴史・文学・美術など多方面で活躍)は、佐賀・長崎・天草と巡りながら雲仙岳を好んで漢詩に歌いましたが、大村湾を旅した際の船中では、大村湾を琵琶湖と対比させて“琴湖(ことのうみ)”と歌い、以来、大村湾の雅称として地域で永く親しまれており、“琴海”などの地域名の由来ともなっています。

昭和9年、雲仙岳が国立公園に指定され、翌年にオープンした雲仙観光ホテルの経営を県から託された橋本喜造氏は、昭和 14 年に出版した「国立公園雲仙大観」の中で、江戸時代以降の雲仙岳を題材にした漢詩や歌、絵画等を幅広く収録・紹介し、雲仙岳が遠景・近景の両面で優れ、東西南北に異なる表情を見せるとして“富士山に負けない魅力”を力説されていますが、“最も秀麗なる山姿”として、大村湾を隔てて雲上に展望される雲仙岳を高く評価しています。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、大村市内を旅してみませんか？

●大村市の観光情報はこちら ⇒ 大村市観光コンベンション協会 <http://www.e-oomura.jp/>



JR 大村線の大村駅から